

第38回 放送番組審議会議事録

2026年4月13日

株式会社シーエス・ワンテン

株式会社テレビ朝日

1. 開催年月日 2026年3月5日 木曜日 午前10時30分～12時00分

2. 開催場所 株式会社テレビ朝日本社8階特別会議室

3. 委員の出席

委員総数 11名 出席 9名 書面参加 1名 欠席 1名

出席委員の氏名

委員長	池井 優	(慶應義塾大学名誉教授)
委員	笹田 佳宏	(日本大学法学部新聞学科教授)
委員	高木 美也子	(東京通信大学人間福祉学部教授)
委員	戸張 捷	(株式会社ランダムアソシエイツ代表取締役)
委員	平島 綾子	(日経エンタテインメント!編集長(デジタル開発担当))
委員	保田 隆明	(慶應義塾大学総合政策学部教授)
委員	前田 純弘	(昭和女子大学現代ビジネス研究所特別研究員)
委員	元村 直樹	(明治大学法学部兼任講師)
委員	四本 裕子	(東京大学大学院総合文化研究科教授)

<書面参加>

委員	後藤 洋平	(朝日新聞社東京本社編集局 編集委員)
----	-------	---------------------

<欠席>

委員	竹内 章子	(弁護士)
----	-------	-------

放送事業者側出席者氏名

株式会社シーエス・ワンテン

代表取締役社長	福田 泉
---------	------

業務推進本部長	船越 昇
---------	------

株式会社テレビ朝日

コンテンツ編成局総合編成部長	河野 太一
----------------	-------

コンテンツ編成局総合編成部サテライトメディア担当部長	谷 俊之
----------------------------	------

コンテンツ編成局総合編成部	平野 千春
---------------	-------

スポーツ局スポーツニュース部	及川 紫
----------------	------

ビジネスプロデュース局CS事業部長	中口 裕丈
-------------------	-------

ビジネスプロデュース局CS事業部CS編成担当部長	川北 桃子
--------------------------	-------

ビジネスプロデュース局CS事業部CS戦略担当部長	深津 友裕
--------------------------	-------

4. 議 題

「テレ朝チャンネル1」、「テレ朝チャンネル2」の番組について

5. 審議内容

◆テレ朝チャンネル1

「戦後八十年に捧げる 舞台『あゝ同期の桜』 番組審議◆

<番組内容>

昨年9月に放送いたしました舞台「あゝ同期の桜」は、1967年に榎本滋民さん作・演出により舞台演劇化された作品となっております。その後、再演もございましたが、2015年からは原作に上田浩寛さんが潤色し、錦織一清さんが演出を手掛けるようになり、4回目を数える今回、昨年ではございますが、戦後80年という節目の年にこの作品を放送することになりました。

ただ舞台を録画して放送するというのではなく、この作品に情熱を傾けるベテラン演出家と若い役者たち、演劇人の思いを届けたいと考え、稽古場での姿も収録をいたしました。

<委員意見>

- 劇場で遠くからでは分からない表情や細かい動きが映像で見える点は、舞台収録ならではの良さだと思った。
- 過去の出来事に対する位置づけでは、多様な認識に対する配慮が必要だと感じた。
- 映画「あゝ同期の桜」と比べると、舞台版は感情の起伏が途切れず押し寄せてきて、長時間視聴が大変だった。
- 劇場の演目をCSで全編届ける手法には、地方の人や劇場に行けない人への大きな可能性を感じた。
- 演出家の考え方や、若い出演者とのやりとりから、創作の現場の空気が伝わってきて興味深かった。
- 若い人たちが戦争や大切な人への思いを語る場面は、視聴者にとって考えるきっかけになると感じた。
- 古い演出を引き継ぎながら、現代的なアプローチを加えて舞台を構成している点が印象に残った。

<番組担当者から>

貴重なご意見を誠にありがとうございました。

今回、舞台を収録して放送することに関しましては、初のチャレンジでございました。実際、劇場でご覧いただいているお客様、例えば空気ですとか風を感じる場面もございました。それをカメラで収めるにあたり、2階からとサイドからと客席を含め収録いたしました。確かに放送で見ると劇場で見るとかなり違いはございました。

本日頂いた意見を今後番組制作、編成していく上で、生かしていきたいなと思っております。ありがとうございました。

◆テレ朝チャンネル2

『ウルファロン独占密着 250日 1.4プロレスデビューまでの舞台裏

「ゼロからの挑戦」GET SPORTS 特別編』番組審議◆

<番組内容>

この作品は、まずウルフアロン選手が昨年引退を考えていることを聞きつけ、4月から取材を始めました。引退に向かうまでの道のりを追いたかったのですが、進めていくうちにいろいろなウルフアロン選手の顔を見ることができました。何よりも、この作品を通してウルフアロン選手の素顔だったり、ありのままの感情だったり、ご本人そのもののキャラクターが伝わればと思っております。そういうのを最大限生かすためにも、余分なナレーションを使わない、テロップも少なくする、シンプルに番組を作るということを心がけて、2時間の番組を制作させていただきました。

<委員意見>

- 柔道からプロレスへの転身が丁寧に描かれ、金メダリストでも直面するキャリアや収入の現実が浮き彫りになっていた。
- 新日本プロレスの新たなスターとなるウルフさんの挑戦で、番組全体に次の時代をつくる雰囲気を感じられた。
- デビュー戦に向けた未熟さや戸惑い、ショーとしてのプロレスに慣れていない姿が、挑戦者ならではの魅力として伝わった。
- 250日の密着により、競技者としての自信から新たな舞台での不安、そこからの変化が自然に表情で示されていた。
- ナレーションなしでも流れが分かりやすく、取材の丁寧さがウルフさんの言葉や人柄を引き出していた。
- 言語化の得意・不得意を超えて、人となりや生き様が伝わり、プロレスや本人への興味につながる内容になっていた。
- 対立演出はやや強めに感じる部分もあったが、プロレスの構造や物語としては理解できる見せ方だった。
- 全体として安心して見られ、競技としての魅力とエンタメとしての戦略がうまく融合したドキュメンタリーだった。

<番組担当者から>

貴重なご意見をありがとうございました。

まさに、皆さんにおっしゃっていただいたように、アスリートのセカンドキャリアというところで、ある種終わり始まりというところをうまく描ければいいかなと考えておりました。副題のテーマとして何か描けるものがあつたのではと思っています。

番組を作る上ではスポーツ好きの方をターゲットにという作りをしました。その中でもプロレス好きの方というところを意識しましたが、そうでない方にもウルフアロン選手を入り口として、何か知ってもらえるきっかけになればいいと思います。今後もスポーツ好きではない方にも届けられるような、分かってもらえるような番組作りを行っていこうと思っております。

6. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置その年月日

今回の審議会に出された意見については、審議会が開かれた2026年3月5日以降、各番組のプロデューサー、担当者へのフィードバックをはじめ、番組制作会議等で活用し、更なる番組の向上のために適切な措置を講じるよう努めています。

7. 審議機関の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表の内容、方法、及び年月日
2026年4月以降に、ホームページに審議会概要を掲載ともに、放送番組としても公表する
予定です。
8. その他の参考事項
次回の放送番組審議会は2026年9月に開催予定。

以上